

解答

一

- ① 粉 ② 公 ③ 改 ④ 穀 ⑤ 然

二

- ① 営 ② 祝 ③ 額 ④ 率 ⑤ 岸

三

問一 I 江戸時代中ごろ II でも、

問二 激しい労働をするとき

問三 八百年ぐらい前の天皇や身分の高い貴族たち

問四 仕事を中断してとるかんたんな食事

問五 きぐらい

問六 農業や漁業が発展し、食べ物が豊富になり、働く時間も長くなったから。

問七 ア

問八 エ

四

問一 他人と意思疎通ができなかった自分が、合唱部に入って他人に心を開けるようになった。

問二 ア

問三 自分には存在する意味があるし、確定した未来があるので将来に対する不安はない。

問四 うらやましくなる

問五 イ

問六 エ

問七 ア

解説

一

① 「粉碎」こまかく、くだくこと。 ② 「公私」おおやけとわたくし。公事と私事。

③ 「改心」わるかったとさとして、心を入れかえること。

④ 「穀物」人類の主食とする、米、麦、あわ、ひえ、豆の類。

⑤ 「未然」まだそうならないこと。まだ起こらないこと。

二

③ 「猫の額」場所のせまいことの例え。

⑤ 「暑さ寒さも彼岸まで」冬の寒さは春分頃まで、夏の暑さは秋分頃までには和らぐという意味の慣用句。

三

問三 18行め「天皇をはじめ身分の高い貴族たち」をそのままぬき出しますが、これでは15字しかありませんので、直後の「八百年ぐらい前」を付け足して答えをまとめます。

問四 指示語の問題です。傍線部の直前の「そんなときは仕事を中断して、かんたんな食事をとりました」という一文をまとめます。

問五 「気位」とは、自尊心、プライドなどという意味です。

問六 傍線部の直後に「その理由の一つは」とあり、その後に「でも、理由はそれだけではありません」とありますので、この部分を簡潔にまとめます。

四 問一

傍線部の直後に「数年前の自分は想像できただろうか。自分がだれかといっしょに歌っているだなんて。一生、ぼっち状態がつづくのだと思っていたのに」とあります。手紙にも「無意識のうちに、相手を避けていたのかもしれない」「クラスメイトに話しかけられたとしても、どこかで線をひいて、距離をおいてしまうのです」とあります。そんな自分が、みんなと気持ちを合わせて一緒に合唱しているということが自分でも不思議なのです。

問二 手紙の「僕は今、将来に対する不安がありません」から始まる段落を中心にまとめます。自分の兄のこと、自分の将来のことを「僕」が受けいれて、自分の中で前向きに解釈しようとしている気持ちを書かれています。

問三 傍線部のある段落をはじめから確認すると、「自分の人生は決まっています。でも、たまに、みんなのことがうらやましくなるのです」とあります。「自分には存在する意味があるし、確定した未来がある」と自分に言い聞かせる一方で、やはり、何の束縛もないみんなのことをうらやましく思ってしまうときがあるのです。

問四 直後に長谷川コトミが「桑原くんは、わかつとらん」と言っていますので、「僕」の言った「そうね。ありがとう」が「本心」から出た言葉ではないということが伝わってしまったのでしよう。

問七